

～このコーナーは、岩国ゆかりの人物『独立性易禅師』についてシリーズで掲載します～

独立性易禅師

どくりゅうしょうえきぜんじ
独立禅師音読

第2回

～隠元禅師と江戸へ行く～

独立性易禅師となった戴笠たいりゅうは、隠元禅師が4代将軍徳川家綱に謁見する時、江戸へ書記として随行しました。

将軍家綱の前で明の文化について話す機会を得た独立は、明国での儒学や中国伝統の書法、篆刻*1などを紹介したのです。鎖国の日本には、この事が新たな大陸文化の伝来となり、唐様の書の流行をもたらしたとも言われます。文人気質に富み、日本文人画の先駆けとなる水墨画を描き、ハンコの世界から芸術の世界となった篆刻の技法を伝えた独立性易は、「日本篆刻の祖」と言われています。

またこの時、知恵伊豆で知られる老中松平信綱の目にとまった独立は、招かれて埼玉県新座市にある平林寺にしばらく滞在しました。この平林寺には、独立の弟子ふかみげんたい深見玄岱たいけいどう（高玄岱・篆刻家）の発願で建てられた戴溪堂があり、独立の像や碑が祀られています。



【独立禅師の書（五橋文庫）】

独立は、平林寺滞在の翌年、持病が悪化して長崎に帰りました。実はこれにはもう一つ帰る要因があったとも考えられています。独立は仏教についての修行もないまま禅僧となり、満足にお経も読めない事が兄弟子たちの批判にもつながり、肩身の狭い思いをしたのではないとも言われているのです。

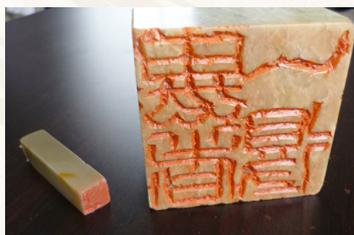
長崎に戻った独立は、興福寺支院の幻寄山で脚の治療をしながら、門を閉ざして3年間の修行に入りました。この間に、水戸学で知られる朱舜水しゅじゅんすいとの出会いがありました。また、深見玄岱を弟子とし、儒学や書法、篆刻を教えています。長崎で独立から手ほどきを受けた弟子たちが、明の篆刻の技術を学び、その後の日本の篆刻の発展に繋がったのです。

68歳の時、長崎街区の大火事に興福寺も類焼の被害にあいます。朱舜水や柳川の儒学者安東省庵あんどうせいあんの世話を受けながら、医業を続けて暮らします。そしてとうとう独立が名医であることが、岩国のお殿様に聞こえてくるのでした。

つづく



【天外一間人 篆刻印】



【篆刻により彫った石】

Saryo Ooishi

記 大石 紗夢

一般財団法人 五橋文庫 館長
岩国篆刻会 会長



*1篆刻（てんこく）

…石材に印を刻む行為。中国、明代に多くの篆刻家が輩出され、篆刻は詩、書、画と並び文人の芸の一つとされた。